

送る言葉

経済学部長 廣 田 功

経済学部では、2010年3月末をもって、田邊裕、高橋満、別府祐弘、石井昭夫、向山秀昭、佐室瑞穂、川又邦雄の7先生が定年退職された。同じ時期に学部を定年で退職された先生は、観光経営学科の石川政徳先生を初め他にもおられるが、慣例にしたがい、本誌に寄稿されたこれら7先生について、経済学部を代表してご紹介し、送る言葉に代えさせていただきたい。

田邊裕先生は、東京大学大学院教授を定年退職の後、慶応大学教授を経て、2002年4月に本学に経済学科教授として着任され、定年退職までの8年間本学の研究教育の発展のために文字通り八面六臂のご活躍をされた。ご専門は地理学で、本学部では学部と大学院で地誌学、経済地理学を中心に担当された。着任と同時に経済学科長を務められ（2007年まで）、また2004年4月からは経済学部長、大学院経済学研究科長、同経済学専攻主任（2007年3月まで）、観光経営学科長（2005年3月までの1年間）、2007年4月から日本語予備教育課程科長と国際交流委員長を務められた。その上、先生はこの間、国際地理学連合（IGU）副会長、学術会議（特任）連携会員、日本高等教育評価機構評価員など、学外においても数多くの要職を務められた。それだけではない。忙しい行政職務の合間を縫って、科学研究費の共同研究や産業リサーチセンターのプロジェクト研究など、いくつかの研究代表を務め、一貫して研究面でも第一線で活躍を続けられた。わが身に照らすと、誠に驚嘆すべきご活躍ぶりであった。先生とは14年間、同じ東京大学に勤務していたが、学部・研究科を異にしていたので、その間お会いする機会はなかった。先生に初めてお会いしたのは、「文化系フランス政府給費留学生の会」の幹事会の席である。たしか今から7年前のことであったと記憶している。年に数回開かれる会議の後、同じ京王線沿線に住んでいた関係で、いつも帰りはご一緒させていただいた。これがご縁で帝京大学にお誘いいただくことになった。お誘いに応じて、新潟大学を1年早く退職し、2009年4月に本学にお世話になってからは、ことあるごとに研究室を訪ねてご教示を仰いだ。先生はいつも丁寧にお答えくださったが、「学部長見習い」として1年間教え込むお考えであったのだろう。今、先生の後を引き継いで、曲がりなりにも学部長を務められているのは、この「見習い」に負うところが大きい。

高橋満先生は、東京大学大学院教授を定年退職後、2000年4月に本学教授として着任された。7人の先生の中では最も長く本学に勤務されたことになる。ご専門は中国経済論で、中国人留学生が数多くいる本学の研究教育においては先生のご貢献は多大であった。学部としては、先生の後を埋める優秀な中国経済の専門家を1日も早く見つけることが大きな課題であると考えている。高橋先生とは、僕が東京大学経済学研究科主任を担当していた時期を含めて時々、研究科委員会で同席した記憶がある。先生は総合文化研究科所属の経済学系の教官を代表して研究科委員として参加されていた筈である。先生が当時所属しておられた応用経済学専攻と僕の所属していた経済史専攻とは、東大経済学部の「伝統」の中で比較的近い関係にあったせいも、その頃から親近感を感じていた。帝京大学に着任し

た当初、知り合いがほとんどいない中で久しぶりにお会いし、とても懐かしく、安堵の気持ちを抱いたことを思い出す。また、研究科委員会では、しばしば真摯な研究者としての立場から厳しくも温かい指摘をされていた姿が印象に残っている。目下、西村可明研究科長の下で、大学院のカリキュラム・教育体制の充実が進められつつある。これによって、先生の指摘がいささかなりとも活かされることを期待している。

別府祐弘先生は、2002年4月、成蹊大学教授を経て教授として着任された。「経営学総論」、「経営管理論」を中心に経営学科の専門科目を担当された。2009年4月の着任と同時に教務委員長をお引き受けした時、別府先生が1年後に定年退職されることを知り、ただでさえ経営学系の教員は手薄なので、先生の後任は何としても早く確保したいと考えた。田邊学部長に相談したが、名案が見つからない。副学長のサジェスションがあり、経済学部では異例のことであったが、結局、公募に踏み切った。当初は1人採用の予定であったが、別府先生の後任を想定したポストには130人以上の応募があった。幸い、途中で副学長から若手も含めて2人採用したらどうかとご提案があり、2人の採用となった。選考作業は大変であったが、嬉しい誤算ではあった。

石井昭夫先生は、立教大学観光学部を定年退職され、2004年4月に本学法学部観光コース担当の教授として着任され、2005年4月、観光経営学科新設と同時に経済学部に移られた。先生は、立教大学に勤務される前、長い間、特殊法人日本観光協会（現独立行政法人国際観光振興機構）に勤務され、パリ・ジュネーブの事務所次長・所長を務められた、観光実務の経験豊かな研究者である。本学では、観光学、世界観光史などの講義を担当される一方、2005年4月からは田邊先生の後を引き継いで学科長を務め、新設の観光経営学科の基礎固めに重要な役割をはたした。石井先生とはパリ滞在の経験を共有していることから、また、僕が社会史に対する関心の延長で観光史に興味を持っていることから、比較的よく話をさせていただいた。退職後しばらくたったある日、何かの催しの帰路、現在執筆中の「世界観光史」の出版計画について楽しそうに語っておられた。石井先生が担当されていた「世界観光史」は、来年から僕が担当することになったので、良いテキストか参考書がないものかと調べてみたが、見つからない。先生の「世界観光史」の上梓が待ち遠しい。

向山秀昭先生は、石井先生と同じく、2004年4月、法学部観光コース教授として着任され、2005年4月の観光経営学科設置とともに経済学部に移られた。本学着任の前職は、財団法人国際観光サービスセンター会長であり、この職務は現在も続けておられるとのことである。また、2008年4月には、近畿日本ツーリスト(株)取締役役に就かれる一方、同年5月から日本国際観光学会副会長を務められている。学部では、「観光学概論」、「グリーンツーリズム論」、「交通産業論」他をご担当されたが、長い実務経験に裏打ちされた実践的な講義は、学生の関心を大いに掻き立てたに違いない。

佐室瑞穂先生は、キリンビール(株)常務取締役、キリンビバレッジ(株)社長を経て、2005年4月、観光経営学科設置と同時に教授として着任された。「飲料食品文化論」、「外食産業経営論」、「現代英語」を中心に観光経営学科の専門科目を担当された。全体として実学的性格の強い観光経営学科のカリキュラムの中でも、佐室先生がご担当されたこれらの科目はとりわけその性格が強く、先生のようなわが国有数の企業経営のトップを教授陣に持ったことは学科の強みであり、誇りである。観光系の学部・学科が増え、ますます競争が激しくなる中で、このような特徴を比較優位として定着させていきたいと思う。

川又邦雄先生は、2005年に慶応大学を定年退職された後、立命館アジア太平洋大学客員教授を経て、2008年4月に経済学科教授として本学に着任された。したがって、2年間の短い在任ということになる。

川又先生は、理論経済学、厚生経済学の専門家として国際的にも著名な方である。本学では、「ゲーム論」、「マイクロ経済学」を中心にご担当いただいた。本誌への寄稿文によれば、現在ゲーム論のテキストを準備中で、本学の2年間の講義で使用された講義ノートを見直されているとのことである。年間の経験が良いテキストの作成に活かされれば喜ばしいことである。

各先生は、それぞれ本学とはまったく異なる環境で長年勤務された後に本学に移られ、当初は大いに苦勞されたことと思うが、めでたく定年を迎えられたことをお祝いするとともに、最後に、先生方の今後のご健勝とご活躍を祈念しつつ、改めてこれまでのご尽力に感謝申し上げます。

